

目次

- ① 啓発活動のストーリーイメージ
- ② 啓発活動の多様な協働体制イメージ
- ③ 川口市の強みを生かした循環モデル
- ④ 当面の啓発活動のイメージ「雑がみさまを探せ！」を軸に
- ⑤ 川口市 第3次環境基本計画との親和性
- ⑥ 川口市 SDGs 未来都市計画との親和性
- ⑦ 期待される成果イメージ
- ⑧ 本提案への思い
- ⑨ 将来的な啓発活動の広域展開への期待

(参考)

- ・ 雑がみさまを探せ！（雑がみ回収促進社会実験）
- ・ 紙リサイクルの重要性
- ・ 紙リサイクルとSDGs
- ・ Towards 2030 & Beyond ・ 古紙センターPDCA

1. 啓発活動のストーリーイメージ

各自治体では、ゴミ焼却施設の更新・統合や最終処分場キャパの課題が顕在化しつつあり、**資源循環型モデルの更なる推進**が急務。

本提案は川口市を始め、**各自治体が有するポテンシャルを最大限**に活かし、**「人・資源・地域経済」が循環**するローカル・エコシステムの推進を目指すもの。

紙リサイクル（特に雑がみ）を中核とした地域共創モデルを推進し、**「環境」「教育」「地域経済」**の3分野を横断的に結び付けることで**「見えるリサイクルの輪」**を目指す。

導入に際しては**既に川口市が有する**地域資源、制度、ネットワークを**最大限活用**しながら、持続可能な紙リサイクルモデルを**「啓発活動」を通じて「可視化」**する。

(起) 紙ごみや雑がみをめぐる課題の再認識

(承) 埼玉の各自治体がこれまで積み上げてきた積極的施策と地域資源の可視化

(転) それらを有機的に統合し、**地域全体の参加型**で展開する循環モデルづくり

(結) その成果が県民生活の質を高め、**川口・埼玉ブランドと環境施策の発信力**を高める

1. 啓発活動のストーリーイメージ

資源循環を共創の中核主体として、雑がみ回収・利用を地域コミュニティに根付かせる。

多様な生活者・事業者・行政を結び、その成果と意義を可視化・共有することで、持続可能な地域共生圏の形成を目指す。

3つの軸を有機的に構造化する。

(1) 「見える化」×「つながる化」

自治体や企業、団体との共創事例を公開し、「つながり」の存在を社会に共有。

(2) 参加共感型コミュニケーション

情報の一方通行脱却「わかる・できる・続ける」体験を設計。

(3) 地域コミュニティ内経済・価値の共創

地域の循環共生圏、地域経済や自治体の課題解決と一体化するメッセージを意識。



2. 啓発活動の多様な協働体制イメージ

行政

各行政（廃棄物、資源リサイクル関連、福祉、教育委員会等）：施策調整、拠点整備、学校授業導入、公益施設運営

教育機関

小中高、大学（埼玉学園大、川口短大、星美短大、東洋大赤羽C）、新入生環境授業、ボランティア活動、PBL型地域参加

福祉・高齢者団体

就労支援B型事業所、社会福祉協議会、老人クラブ等：拠点運営補助、見守り交流

企業・商工会

スーパー、包装印刷、食品、信金、運輸等：店頭広報、ポイント制度連携、雑がみ袋広告、事業系雑がみ回収、SCCI連携

市民団体

PTA、NPO、環境ボランティア：地域拠点協力、イベント運営、住民啓発

メディア・研究機関

地元新聞社、TV、SNS、大学研究室等：広報支援、効果測定、全国展開モデル評価

静脈・製紙産業

県南ゾーン周辺の製紙工場、古紙問屋、回収収集業者：雑がみ受入、回収・品質管理、搬送

スポーツ団体（少年・プロ）

少年野球団・サッカー団等：集団回収、資源回収協力、啓発活動、保護者との家庭連携、エリア内のプロ球技チーム連携

需給両業界団体

古紙再生促進センター関東地区委員会、関東商組（埼玉支部）、回収団体：活動全般支援

3. 川口市の強みを生かした循環モデル

環境施策の先進性

温暖化対策や資源循環、環境教育を統合的に推進し、県民参加型施策や拠点整備により、地域特性を活かした先進的な環境行政を展開。

地域内処理体制

エリア周辺圏内の5製紙工場の存在に代表される地域内の古紙利用体制が整っており、紙資源を地産地消。

豊富な地域教育資源

高等教育機関を始め、小中高・大学・高齢者団体など多世代を巻き込める地域教育資源が豊富。

地理的優位性

埼玉・県南ゾーンを中心とした、人口集積地が隣接、連携しやすい地理構造や交通のアクセス優位性、物流ネットワーク。



製紙工場・地域内処理体制イメージ

川口市は、ものづくりの伝統産業と都市近郊型の住宅地が共存する特性を持ち、多様な市民が生活する都市である。鋳物や金属加工に代表される地域産業は、資源循環やリサイクルの思想と親和性が高く、本モデルが目指す地域内再資源化のシステムと整合する。また、市内には環境意識の高い市民団体や学校が多く、環境学習の土壌が育っており、雑がみ回収活動を通じて分別の重要性を浸透させる実証の場として適している。さらにSDGs未来都市、ゼロカーボンシティにも選定されており、脱炭素・循環型社会への政策的後押しが得られやすい。外国人住民の比率も高く、多言語対応の環境啓発や国際的な共創を組み込んだ新たなモデル創出にもつながる。こうした川口市の強みと本モデルは、地域循環共生社会を実現するうえで多面的に親和性を有する。

本モデルでは、回収された雑がみを地域内で選別・加工し、連携可能な製紙工場にて再資源化する“紙資源の地産地消”を再確認することで、輸送コストや環境負荷の軽減を図ると同時に、地域内経済の循環性を高める仕組みを充実化。

新規設備や格段の追加投資を前提とするのではなく、すでに川口市を始め、県南ゾーンが有する地域資源、制度、ネットワークを最大限活用しながら、段階的かつ持続可能に展開する「**啓発モデル**」を可視化。

4. 当面の啓発活動イメージ「雑がみさまを探せ！」を軸に（2025～26年度）

雑がみ啓発と学校教育との接続

市内・小学校において紙リサイクルに関する啓発活動「雑がみさまを探せ！」を通じた出前授業やワークショップを実施。「子供から家庭を変える、社会を変える」児童や保護者の家庭内分別を促進。

エリア内の製紙工場群との連携

鶴見製紙を始め、埼玉・県南ゾーン及び隣接する地域には紙リサイクルの地域内処理・利用が可能な、5製紙工場の存在があり、それらとの連携を通じた、紙資源リサイクルの地産地消を推進。

スポーツ団体との連携

スポーツ少年団の資源回収活動協力、運動と公共活動の融合を図る。集団回収活動の活性化、世代間交流の機会にも繋げる。また、県内のJ・B・T・WEリーグチームとの連携を通じ、試合時の「雑がみさまを探せ！」啓発キャンペーンを図る。

市イベント・施設に於ける啓発活動

多くの市民が参加する、市民イベント、祭り、環境フェアやリサイクルプラザ、公民館などを通じた「雑がみさまを探せ！」の啓発、地元キャラクターとの連携を通じ、一人ひとりの参画意識醸成を図る。

大学生ボランティアとの連携

埼玉学園大、川口短大、東洋大赤羽台Cなどの学生を募集、「雑がみさまを探せ！」運動の支援を通じた持続的な啓発活動の組織力強化、学生自身への社会課題解決体験のきっかけとする。

地元企業との連携による資源循環

大規模商業施設、商店街店舗を通じた、地域ポイント利用・認証制度（「川口リサイクル応援店」等）による消費者との接点強化を推進。企業の紙袋への「雑がみ回収に利用」を訴求する表示協力。

5. 川口市 第3次環境基本計画（2018～2027）との親和性

ごみ分別・資源循環の促進

計画では、「ごみ」「循環型社会の形成」を重要施策に掲げ、資源ごみの分別・リサイクル促進を明確に位置づけている。雑がみ掘り起こしを通じた再資源化モデルは、市民の分別習慣の定着や可燃ごみ量の削減に直結し、計画が目指す循環型社会の実現に資する。地域内でのごみ資源の見える化と啓発を通じ、本モデルは計画施策と親和性を持つ。

多文化共生と環境保全

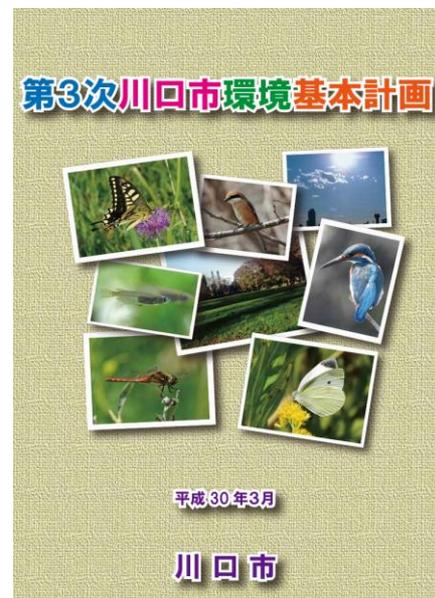
川口市は多文化共生を進めており、環境基本計画にも市民多様性への配慮が含まれる。外国人住民を含めた多文化共生型の資源循環モデルとして、雑がみ回収・啓発を多言語で展開し、文化背景の異なる住民が協働する仕組みを取り込むことで、計画の「誰一人取り残さない環境社会」の理念と親和性を有する。

環境学習・市民参画

計画では、市民・事業者と行政による環境学習や参画型施策が強調されており、学びと行動を通じた環境意識の向上が掲げられている。雑がみ分別ワークショップや学校連携、地域イベント等を通じて、市民主体の環境行動を促進する本モデルは計画が想定する「共働・共創」に資するモデル構築として整合性がある。

地域共生と広域連携

計画は地域の緑・水・ごみといった生活環境の質向上とともに、広域的な環境施策の連携に言及している。川口市が隣接自治体と持続可能な環境取組を連携強化する方向性は、本モデルの近隣市との広域連携や地域共創イベントの展開と重なる。地域内外の主体を巻き込むスケール感が一致し、計画戦略との親和性を示す。



6. 川口市 SDGs未来都市計画との親和性

持続可能な循環資源の創出

市のSDGs未来都市計画では「人、自然、文化の豊かさが共生する『選ばれるまち川口』」をビジョンとし、地域資源の循環・活用を重視している。本モデルは、雑がみを資源として再活用する仕組みを構築し、ごみ焼却削減と循環率向上を推進する点で、この理念と親和性を有する。

地域経済と資源循環の好循環

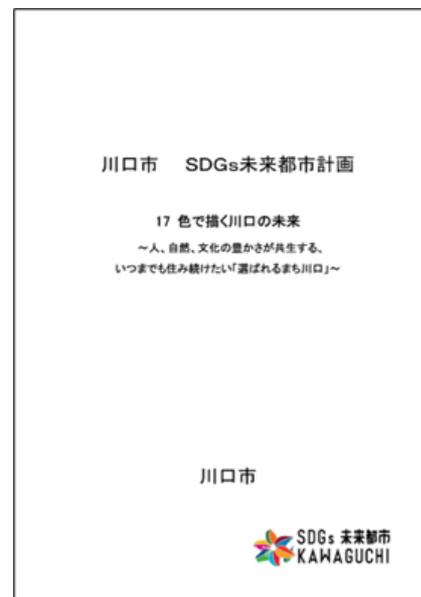
計画では「地域経済の好循環創出」や地域産品PRによる産業活性化を重視する。雑がみ掘り起こしモデルは、回収された資源が地元回収・古紙業者を経て、地元製紙会社に循環し、市内経済・産業活動のサーキュラーエコノミー化を促し、経済と環境を両立させる仕組みとして親和性を有する。

多様な共創のまちづくり

計画の柱となる「自走・自律支援型、魅力向上型のSDGs多様で多彩なまちづくり」では、市民・企業・団体の共創を促進するスキームが重視されている。本モデルも、学校・商業施設・地域団体との協働による啓発活動や回収体制構築を通じて、共創型モデルとして整合し、持続性ある取り組み基盤を共有できる。

持続可能なまちづくり

計画が掲げるKPIの一つに、「川口に住み続けたい」と感じる市民の割合を引き上げる目標がある。雑がみ掘り起こしモデルは市民参加による地産地消・環境行動を促し、まちへの愛着・誇りを高める機会となり、この住み続けたいまちの実現に寄与し得る。



7. 期待される成果イメージ（順不同）

- ・ 雑がみ回収量の増加、可燃ごみに占める紙ごみ比率減少
- ・ 紙ごみによるCO2排出削減効果の定量化
- ・ 地元+広域エリア工場との連携による資源地産地消モデルの構築
- ・ 小中高校生・大学生・高齢者・地域住民のリサイクル意識向上と世代間交流の促進
- ・ 高齢者との交流機会創出による地域コミュニティの活性化、孤立防止
- ・ 障害者の地域参画による共生社会モデルの実証と福祉的就労の場の創出
- ・ 紙リサイクル業界における次世代担い手の掘り起こしと職業理解の深化、学生が地域と繋がる機会創出
- ・ 行政・住民・業界がともに成果を実感できる、参加型の循環型地域社会モデルの形成
- ・ 増加する外国人居住者とのコミュニケーション活性化
- ・ 近隣自治体、関東、更に全国への波及効果 等々

↓ 5%

燃えるごみ量削減

「雑がみさまを探せ！」
を通じた分別底上げ

↓ 5%

ごみ排出量削減

1人1日当たりの
ごみ排出量削減

↓ 15%

紙ごみ比率減少

家庭系の燃えるごみに
占める紙ごみの比率減少

5000+

啓発参加者数

多世代の市民参加による
コミュニティ活性化

8. 本提案への思い

これら一連の対策は、川口市を始めとした「先進的な施策を展開」してきた**各自治体**において、**すでに個別には推進されてきた**要素である。

今回の**啓発モデルづくり**では、それらを有機的に結合し、回収・啓発・再資源化・教育・経済の各分野が一体的に連動する**“リサイクルの輪”**として、**県民に視覚的・体感的に可視化される仕組み**を目指したい。

これにより、県民一人ひとりが**地域循環への参画を一層、理解・実感**でき、**長年積み重ねてきた資源循環の取り組みが、より広く認知**され、成果として花開くことが望まれる。

SDGs未来都市、ゼロカーボンシティ宣言都市を、数多く有する埼玉県において、紙ごみを中心とした可燃ごみ削減の実践は、温室効果ガス削減や持続可能なまちづくりの成果指標とも直結するものであり、**地方自治体の環境政策の模範事例**として、他自治体に発信されることを期待する。

9. 将来的な啓発活動の広域展開への期待

川口市での「**雑がみさまを探せ!**」を通じた啓発モデルは、段階的に埼玉・県南ゾーンへ展開可能なスケラブル（拡張可能性）構造を有する。まず2025～26年度に川口での啓発活動はじめ、諸課題の整理を実施し、モデル成果を蓄積。

2027年度には、**地産地消型の紙リサイクルが成立しやすい環境**にあり、川口市と、まちづくり協議会を有する、県南4市協議会（草加・蕨・戸田）、県内最大人口・さいたま市や、南西部エリア（新座・朝霞・和光・志木など）の自治体と連携拡大し、広報、リサイクル啓発拡大を目指したい。

静脈産業と自治体のクロス連携を加速し、段階的・実証型のモデル普及を通じて、広く埼玉県民の紙リサイクル参画への理解向上に繋がることが望まれる。

尚、2028年以降は別途検討予定の東京、千葉などの隣接地域との広域展開に繋がるモデルも加え、2030年頃には広域環境政策への反映を目指し、「雑がみ資源循環ネットワーク」を念頭に置いた、資源リサイクルの全体最適化も視野に入れたい。

(参考) 雑がみさまを探せ! (雑がみ回収促進社会実験)

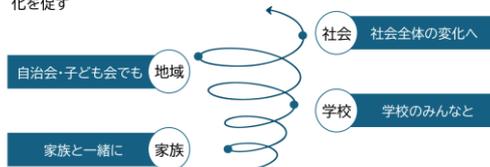
目的

雑がみの認知度向上並びに分別・回収の習慣づけを目的とした啓発活動
 ⇒ 幼少期(学童期)からの分別習慣の効果は大きく、未来にわたって環境配慮行動を行う人材育成につながる



目的

子どもを発信源として家族と一緒に取り組むことで、同居する親世代の意識変化を促す



「子どもを変えていくことで親を変え、社会を変えていく」

効果(自治体・業界)

可燃ごみに捨てられる雑がみ回収促進を進めることで、可燃ごみの削減や新たな製紙原料の確保につながる



「雑がみさまを探せ!」は、いかにして子供たちに家庭での雑がみ分別に誘導するかを、大阪大学大学院経済学研究科・松村真宏教授(仕掛け)と当センターが連携する新たな試み。

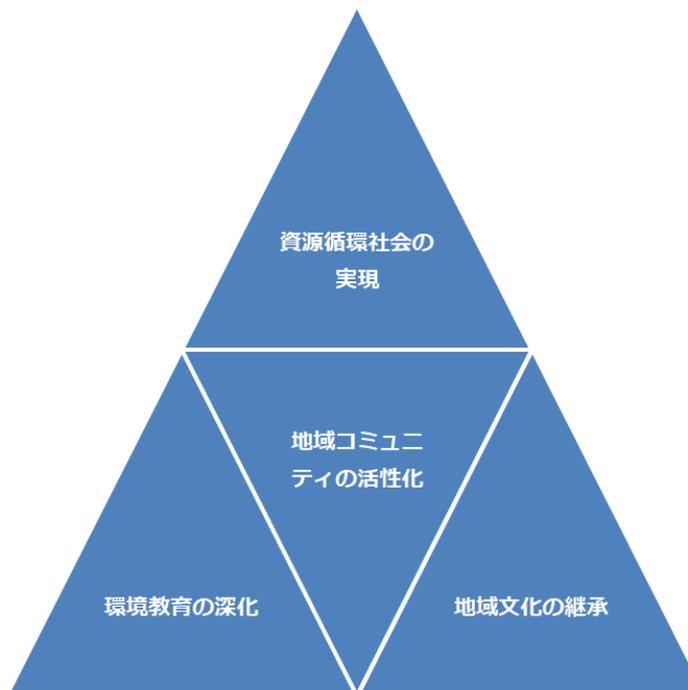
仕掛けのアプローチとは、正論(従来の正攻法)で解決しなかった社会課題を正論は使わずに参加者(小学生)が興味を持ちそうな「仕掛け」を利用することで、結果的に望ましい行動を実現し、その後も親世代を絡めて、家族で継続しやすい仕掛けを狙う。

子供達への「仕掛け」コンセプト
 紙=カミ(神) ⇒ 家庭の中には、神(紙)様・「雑がみさま」が宿っている。



一般向け

(参考) 紙リサイクルの重要性



紙リサイクル、とりわけ家庭や地域から排出される「雑がみ」は、その性質上、行政・業者・市民の協働によってのみ更なる分別と回収が可能となる分野。

また、資源循環・地域交流・環境教育・福祉・社会包摂といった複数の公共的価値を同時に実現できる特性を持ち、地域循環共生社会の実装モデルとして即効性が期待される領域。

(参考) 紙リサイクルと SDGs

SDGs・紙のリサイクルが果たすべき役割

(2022年制定)



4 質の高い教育をみんなに

■紙のリサイクルの役割

⇒紙の再生品の利用、リサイクルを学べる教育の機会を提供する



11 住み続けられるまちづくりを

■紙のリサイクルの役割

⇒使用済の紙を分別して再利用を図り、資源の有効活用を図る



12 つくる責任 つかう責任

■紙のリサイクルの役割

⇒製紙業界のリサイクル可能な商品開発の推進に貢献する
⇒消費者の持続可能な社会形成への参画意識を醸成する



13 気候変動に具体的な対策を

■紙のリサイクルの役割

⇒ごみの資源化による脱炭素社会の実現に貢献する



15 陸の豊かさも守ろう

■紙のリサイクルの役割

⇒森林資源の持続可能な利用に貢献する



17 パートナーシップで目標を達成しよう

■紙のリサイクルの役割

⇒多様なステークホルダーが連携し、持続可能な社会を実現する

日本の紙リサイクルは国民の分別意識の高さや善意に支えられ、また長年にわたる関係者の努力の結果、資源の有効利用や廃棄物の減量化といった循環型社会の形成にも大切な役割を果たしてきた。

当センターは、消費者や事業者を始めとした紙リサイクルに関わる多様なステークホルダーの皆様とともに、広報啓発、調査研究等の事業を通じた古紙の回収や利用の促進に向けた約半世紀弱の歴史を積み重ねている。

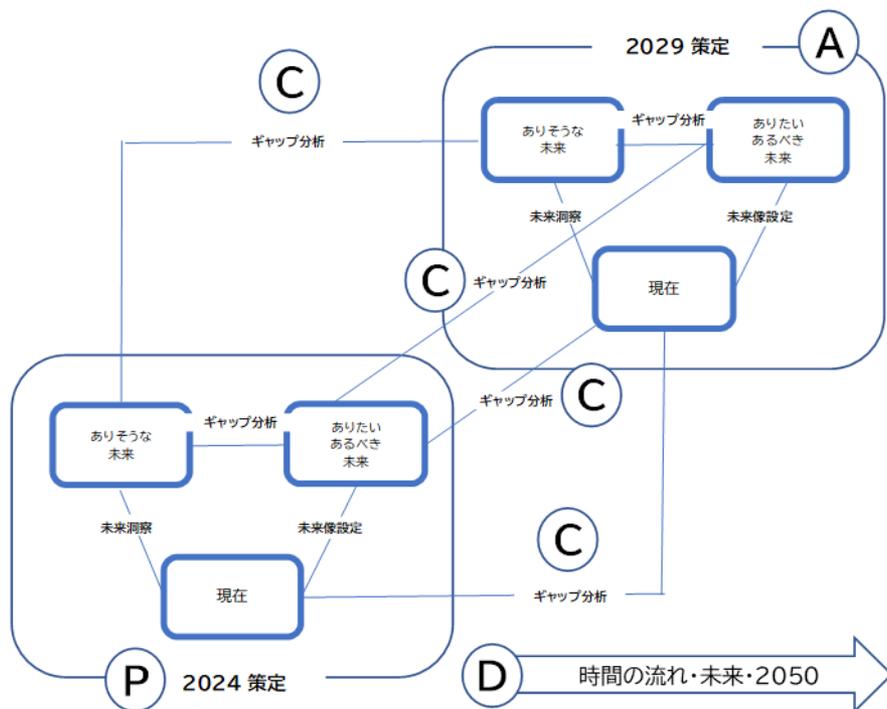
時代背景や社会が変化してきた現在も変わらず、むしろ様々な社会課題が深刻化し、国際社会がSDGs（持続可能な開発目標）の達成など持続可能な社会の実現を目指す中、原点に立ち返ったセンター活動がより一層重要になると考える。

当センターは創立半世紀の節目に向け、活動を支えていただいている皆様とともに、まずは紙リサイクルとSDGsとの関連性を再確認することを2022年にスタートした。今後も多様な立場の方々との共通言語ともいえるSDGsを通じて、小さな連携の積み重ねを大きな力に繋げ、紙リサイクルの更なる発展を目指す。



(古紙センターSDGsレポート)

(参考) Towards 2030 & Beyond・古紙再生促進センターPDCA



当センターは創立半世紀を迎えたが、その節目に当たり多くの関係者の方々から寄せられた「20」の中長期課題（サステナブルチャレンジ2050・共創共生）をお示しした。本年度から、一連の課題対応に向けての具体的な対策や、新たな試みを開始するに当たり、ロードマップイメージである「Towards 2030 & Beyond」を策定した。

様々な社会課題解決に向けた布石は2030年までがラストチャンスであり、その影響が未来の可能性を左右すると言われる時代にある中で、環境・経済・社会側面の統合的向上や、リサイクルに関わるマルチステークホルダーとのパートナーシップを念頭に置いた事業を通じて、循環型社会形成に関する連携・協働のつなぎ手としての、更なる努力が当センターにも求められている。

今後の課題対応については需給両業界の協働に加えて、これまで以上に広く、紙リサイクルに関わるステークホルダーが、改善できる技術や意識改革を総動員した、統合的なシナジーや全体最適を議論すべき時期にある。



「サステナブルチャレンジ 2050・共創共生」



「Towards 2030 & Beyond」



「創立 50 周年記念誌」

当面の啓発協働・検討についての「一例」（順不同）

本モデルの定着化に向けた**啓発実験事業「雑がみさまを探せ！」**を軸に（2025年～2026年）

- ・ 埼玉学園大、川口短期大学、東洋大学（赤羽台キャンパス）、星美学園短大等からの啓発ボランティア確保（仮称・古紙センターボランティアプログラム認定）により「雑がみさまを探せ！」運動支援を通じた持続的な啓発組織力強化、学生自身への社会課題解決体験のきっかけ。
- ・ 川口市と地域連携協力協定大学との連携模索（埼玉学園大、順天堂、東京理科、お茶の水女子）学園祭でのブース出展、継続的な啓発掲示
- ・ 川口市連携：協定締結、SDGsパートナー・プラットフォーム、子ども大学かわぐち（埼玉学園大）、朝日環境センター、支所・公民館等での「雑がみさまを探せ！」啓発、外国人居住者啓発モデル研究、地球温暖化防止活動推進センター、回収団体連携、キャラクターコラボレーション（ごみまる×雑がみさま）
- ・ 市内小学校に於ける「雑がみさまを探せ！」啓発実験、回収体験
- ・ 川口市商工会議所、青年会議所、婦人部、市商店連合事業協同組合等との連携、関連企業先での継続的「ローテーション」雑がみ回収運動
- ・ 市内のかわぐち環境フェスタ、エコライフDAY、ゼロカーボン相談会、CLEAN UP川口領家、川口本気祭り、川口たたら祭り等のイベントでの「雑がみさまを探せ！」キャンペーン、WS、公開授業
- ・ 「雑がみさまを探せ！」回収啓発ボックス寄贈・設置実験（市内の小学校、支所・公民館、図書館、リサイクルプラザ、商業施設（ドラッグ、量販、ホームセンター、スーパー等）
- ・ アヴェントゥーラ川口、FCアビリスタ、埼玉パスポートFC等の地域貢献連携、試合会場での「雑がみさまを探せ！」啓発キャンペーン、ジュニア・保護者啓発 等々……………

キャラクター コラボレーションイメージ



要・ロゴ使用許可申請



川口市 ごみ減量キャンペーンキャラクター
ごみまる

